

2006 第12回日本トライアスロン選手権東京港大会レース速報

庭田清美は2連覇、田山寛豪は2年ぶりの優勝

2006NTTジャパンカップチャンピオンに中西真知子と杉本宏樹

10月22日(日)、東京・お台場で第12回日本トライアスロン選手権が行われた。

午前8時40分スタートの女子は、ウェットスーツ着用。古谷あかね(トヨタ車体)が一番手でスイムを終え、バイクへ。バイクでは、古谷と田中敬子(チームゴージャ)が逃げたが、すぐに後続が追いつき、庭田清美(アシックス・ザバス)、中西真知子(NTT東日本・NTT西日本)、忽那静香(日東紅茶・TEAM KEN'S・A&A)、崎本智子(枚方SS)、足立真梨子(日東紅茶・TEAM KEN'S・A&A)、浅沼美鈴(愛知県協会)を含む8名が第1集団を形成した。ランでは、庭田が序盤から積極的に走り、中西、忽那、田中らを引き離して2連覇を遂げた。2位には第2集団から追いついた関根明子(NTT東日本・NTT西日本)が入り、3位には中西が入った。

午前11時にスタートした男子は、田山寛豪(チームテイケイ)と平野司(NTT東日本・NTT西日本・Weider)がリードするすぐ後ろを山本良介(トヨタ車体)が追う。その後に、杉本宏樹(チームテイケイ)と西内洋行(西京味噌)、福井英郎(トヨタ車体)が続く展開となった。バイクでは、田山と平野が逃げ、それを山本(良)と杉本が追う。その後ろを9名の集団が追いかけて、4週目を過ぎたところで、11名の先頭集団ができあがった。ランでは、高濱邦晃(日本食研)、田山、杉本がゲッドヒートを繰り広げたが、最終周に飛び出したのは田山一人。



迫力ある男子のスタート(上)、集団を引っ張る庭田(下)

ベテランの自覚を見せた庭田



「今日は、ガンガンいかなければいけないレースでしたから、ちょっときつかったです」と、開口一番庭田は言った。万全のレース展開に見えたが、実は本人は意識してレースを引っ張ったのだという。「今日は、本物のトライアスロンを、たくさん集まった観客の方たちに見てもらいたかった」と言う庭田は、「バイクのときから、一緒に集団の選手たちもめいっぱいの走りを見せたと思いますから、とてもつらかったことは事実です」と語った。女子の第一人者の意識もあり、そしてトライアスロンを着実に根付かせようという発言も、35歳というベテランのものだ。これで、来年のアジア選手権の出場権を獲得した庭田の次のレースは、ITUワールドカップ・ニュープリムス大会ということだ。ぜひ、今年の締め括りにすばらしいレースを期待したい。

NTT東日本

NTT西日本

Kyorin

JAL

ORINO

weider

asics

Kodak

SHU

TAIHEI

CASIO

resort trust

JCB

LEOPALACE RESORT

日産自動車

Gakken

文化総合研究所
BUNKA SOUSO KENKYUSHO

2006 第12回日本トライアスロン選手権東京港大会レース速報

庭田清美は2連覇、田山寛豪は2年ぶりの優勝

そのまま田山が逃げ切って昨年に続いて3度目の優勝となった。2位には、チームメイトの杉本が入り、3位は高濱が入った。

このレースの結果、2006NTTジャパンカップチャンピオンは、女子は中西、男子は杉本が獲得することとなった。

レース後には、エイジグループ年間ランキングの表彰も行われ、女子は佐藤千佳(神奈川県連合)、男子は福元哲郎(広島県協会)選手が獲得した。

なおレースの様子は、フォトギャラリーでご覧になれます。



選手権表彰(上)とジャパンカップ表彰の6名ずつ

実力を見せつけた田山



今日、ハワイ・アイアンマンを戦っている小原工選手が最後の練習で、「田山に刺激を与えてもらった」と言ってもらえたことが田山にいいモチベーションとなったようで、気持ちよく、デッドヒートを制した。それでも、同僚の杉本とワンツーフィニッシュできたことが何より嬉しそうで、「いっしょに練習してきて、ワンツーを決めようと二人で決めて、周りにも言って、実現できたのがよかった」と手放しの喜びようだった。

不調が噂される平野についても、「スイムで逃げましょう」と言われてその通りになり、だんだん調子が戻ってきている感触を得たようだった。

今年は海外を中心に転戦したため、ジャパンカップチャンピオンは逃したが、日本選手権で名実ともに第一人者の実力を見せつけた格好となった。

次のレースは、ITUワールドカップ・カンクン大会となる。

思いがけないチャンピオンと中西



「今年は、日本でのレースが少なかったのも、まったくジャパンカップチャンピオンをとれるかどうか考えていませんでした。昨日、レース予想の中に私がシリーズチャンピオンに一番近い事を知り、ビックリしたぐらいです」と、中西は突然の出来事のように驚いて見せた。

前週の日本スーパースプリント選手権銚子大会で2位となっていたのが、幸いした格好だ。「今年は、表彰台に縁がなかったのも、こんなに観客の多い東京港で3位になって、パフォーマンスをファンの皆さんにアピールできて、最高のシーズンになりました」と語ってくれた。

今年は、故障続きで満足な戦いができなかったという中西の次のレースは、ITUワールドカップ・カンクン大会。最後に、世界にアピールする走りを見せてほしい。

やっと花開いた杉本は、満面の笑み



「シリーズ優勝は考えてなかった、というのが実際のところですよ」と話し始めた杉本は、「今日のレースは、いままでやってきたことがすべて出せるように頑張りました」と語った。レース前は、チームメイトの田山と「どちらが先になるかわからないが、ワンツーフィニッシュしよう」と約束したそうで、「実現できて嬉しいです」と、杉本は言う。世界を目標に精進する田山は、同年齢ながらよいお手本になるそうで、「今後は、追いついて、追い越せるようになりたい」と、今後の豊富を語った。やっと結果が出た杉本は、満面の笑みをたたえてコメントした。

